

殺伐とした現代にしみこむころろの言葉

佐相 憲一

何気ない言葉が読んでずっと胸に入ってくる。それが大森ちさとさんの詩世界だ。日常を生きて、働いて、交流して、そのような人生をある程度経て、ころろの声に耳を澄ませる。思いが、一方では個人的に、他方では普遍的に、各ページの短い詩の言葉からじんわりと立ちのぼってくるようだ。

冒頭の詩「ここ」を読んでみよう。

ここ

そこにいるのですか。
はい。ここにいます。
いつまでいるのですか。
わかりません。
ここってどこですか。
ここです。

自らの立ち位置を確認し、時の流れの茫漠とした不安にやられないように淡々と「いま」を刻印している。人生や社会の中で自分がいまだどこにいるのかはつきりしないものだ。だからこそ「ここ」を確認するこの言葉は、読めば読むほど味がある。

薄紫の

ちいさな ちいさな花が
咲いている
あちらこちらと咲きつづけ
小さな
音を奏でている

この詩にはかなしみを含んだ希望が香っている。

第二章「人の世」は、そのような繊細なところをもつ作者が社会のことや、同じ世を生きる他者の世界に踏み込んで書いた詩が中心になっている。

冒頭の詩「土の中で」は名詩だ。

土の中で

土の中で
詩集と白い骨とが眠っている
父が二十七歳で逝った
息子のためにしたこと

二十年経った今
ひんやりとした土の中で

闇をかかえ眠っていた詩集に

詩「夕陽 1」では、苦しみや悲しみを見つめながらも「夕陽に染まってくこと」をうたう。詩「雨」では雨の日の「少年の暖かな手」を刻み、詩「流木」では川の流れに鍛えられた流木を「優しい老人のように」とたとえている。

この第一章「ころろの花」では、「ころろのかたち」がイメージ豊かに展開される。わかりやすい言葉で書かれているので雑に読むと素通りされそうだが、ここには作者の特長のひとつがよく出ている。それは、寂しさや空しさをこまかしたり無理に消そうとしたりせず、ありのままに見つめて受けとめること。そのことで前へ進むというスタンスである。悲しみや空しさそのものの中に光を見るこの人生哲理は、きつとこの作者がかなりしんどい経験をしてきた人だろうと想像させる。だから、言葉に実感がこもっていて共感を呼ぶのだ。

作者は花が好きである。いくつか花を描いた詩があり、各章に散らばっているが、それらの詩は詩集全体をつなげているようでもあり、小さな存在のはかなくもたくましい美しさを愛する作者の人間観や願いなども感じられて印象深い。

詩「すみれ」を読んでみよう。

すみれ

丘の上にすみれの花が咲いている

骨は光を放ちはじめているという

二十七歳で死んでしまった青年を悼む父親が痛切の思いで「詩集」を「白い骨」と並べて埋葬するのだ。そして行間が二十年後の墓に飛躍させ、ひっそりとした墓から熱く漂ってくる骨と詩集の光。詩人は感じとった願いと祈りのかたちをこうして詩作品に刻む。

詩「空は果てしなく」では、「障害者の子を一人残して逝く事／無念さ」を書いた「七十七歳の親の遺言」のことが刻印されている。これも泣かせる詩だ。

詩「散って行く」では、今の世の中の若者の失業にもこころを寄せているし、詩「巡るメール」は阪神大震災被災者の物語である。

こうして詩集は人の世の現実とそこで暮らしている人々の内実へと共感的に深まっていくのだ。

第三章「ふるさと」には、高知県の四万十地域で暮らしてきた作者ならではの目で、さまざまな人のふるさとや、作者自身の大切な記憶などが刻まれている。穏やかな描写や懐かしさの中に、世の中の流れに忘れ去られたような存在を通して静かに何かに抵抗する批評眼もうかがえる作品群である。

詩「願いごと」を読んでみよう。

願いごと

七夕の日

九十歳の老人は何度も呟く

「帰りたいのです。私の生まれた家に

帰りたいのです。父と母の家に」

貴方が建てた大きな家

作り上げた家庭には

子供達 孫達 ひ孫達がいて

貴方が愛した多くの者があるのに

何もなくなつた家に帰りたいと言う

笹の葉は風に揺れ

短冊も風に揺れ

貴方が生まれた日

大喜びした父と母がいて

貴方の願いごととは結ばれる

九十歳の人の子孫との時間を経て、再び生まれた日に帰るといふダイナミックな時空間の詩だ。切ない呟きで始まって、ラストの方で現実さえも飛び越えて過去の時間再生へと展開していく。九十歳の人は赤子になって、父母のやさしい記憶へと抱かれるのだ。この優しさと慈しみと励ましに満ちた感動的な詩には、詩人・大森ちさとさんの人間そのものが出ているだろう。

詩集は終わりの方で、「こころ」のかたちへと静かに帰還する。詩「夜桜」「野に返す」「蛍」「天空の風」という作品群である。

野の自然、命のふるえ、かなしみと希望、その中に人生があ

り、こころがあり、ふれあいがある。透徹した観察はさわやかな余韻を残す。

このような自然な言葉の繊細な詩集は、こころに渴望を抱える現代社会の多くの人々に、また自然風土が破壊されることに悲しみをもつ多くの人々に共感されるだろう。

詩集タイトルにもなっている第二章収録の詩「つながる」を引用して、この新鮮な詩集のご案内を終えよう。

私はこの詩集をそんな現代の人々にひろくおすすめしたい。

つながる

何も驚くことはない

全てつながっているのだ

貴方も私も

町も村も

ネコジャラシも薔薇も

冬も夏も

手をとりあい

つながっている

十年前も今日も

百年前も今日も

手をとりあい

つながっている